

メトロポリスの卵

石原 三日月

わが家の上空に、巨大な卵が浮かんでいる。

それに気づいたのは朝食の時だった。私はいつものように、庭に出したテーブルで夫の作ったオムレツを味わっていた。その卵は雌鶏のドリーが生み落としたもので、毎朝の日課を終えた彼女は地面の砂をついばんでいた。そして、ふと細い首を伸ばして真上を見上げたのだ。

「あれ、なに？」

ドリーに訊かれて、私たちは屋根の上を見上げた。

雲ひとつない透き通った青い空に、銀色に光った丸いものがぼかりと浮かんでいる。地上からは鍋の蓋ほどの大きさに見えた。実際はもっと大きいだろう。

「ねえ、何だと思う？ 雲ではないみたい」

夫に声をかけると、彼は眼鏡のフレームを軽く叩いてフォークスを調整した。

「消えかけの月じゃないか？」

「その眼鏡、買い替えたほうがいいね。月がうちの真上に浮かぶわけないでしょ」

狙いすましたかのように、それはわが家の上空に浮かんでいた。森の中に一軒だけ建った、わが家の上に。

フォークを手にしたまま、彼はしばし考え込んだ。それから低く囁くように、

「言いたくないが——メトロポリスの卵かもしれない」

私が口にしたくなかったことを告げた。そして、二人とも黙り込んだ。

「たまご？」

ドリーが首を傾げる。雌鶏のせいか、卵という言葉に敏感なのだ。

「あなたの卵とは違う卵だよ」

そう言いながら、頭の中でわかりやすい言葉を探る。鶏冠と嘴につけたピアス型の翻訳機は優秀だし、ドリー自身も賢かったが、そもそも鶏の語彙量は人間ほど多くないのだ。

「なかに入っているのは黄身や白身じゃなくて——大きい街なの」

「まち」

この辺境で生まれたドリーは街で暮らしたことはないが、ニュース映像を観ているので、街というものはわかっている。

「その街はメトロポリスって呼ばれる巨大な都市で、あれはその卵かもしれないの」

コッコと、驚いたように一声鳴き、それから流暢に続けた。

「理解しがたい」

「ごもっともだ。夫は苦笑して、話を引き受ける。」

「何十年かに一度、ああいう卵からメトロポリスが生まれ落ちて来るんだ。それは今の時代よりも少しだけ進んだ技術を持つ最先端都市で、そこに住むことによって人間は新しい技術を手に入れた。来て来たんだ。そう、君が今つけている翻訳機とかね。僕たちも若い頃には住んでいたことがあるよ。」

あまり合わなかったけど」

「そのたまごをうんだニワトリは？」

素朴な質問をドリーは投げかけた。人間側は一瞬、ロコもってしまふ。

「噂だけど、廃墟が生むと聞いているよ」

人間で溢れ、きらびやかな日々を送るメトロポリスも永遠には続かない。いずれまた別の卵がどこかの空に現れ、さらに進んだ都市が生まれ落ちるからだ。人々は新しいメトロポリスへと移り、古いメトロポリスは次第に朽ちていく。やがて最後の住人が立ち去り、完全な廃墟になると、最後の力を振り絞って卵を生み落とすという……

彼は懸命に説明したが、ドリーは途中で自分の質問を忘れてらしく、急に地面をついばみ始めた。その清々しいほどの自由さに、私も彼も吹き出してしまふ。

そうだ、こんな穏やかな生活のために、私たちはこの森へ引越して来たのだ。賑やかで刺激的な日々は、もう充分に満喫した。あとはただ、二人で静かに余生を過ごしたいだけなのだ。

それなのに、まさかここにメトロポリスが生まれ落ちて来るなんて。私たちの穏やかな日々はどうなるのだろうか。

危惧した通り、数日後には土地の売買業者が押し寄せて来た。卵の大きさは屋根を覆うほどになつていた。

メトロポリスの生まれ落ちる予定地は、土地の値段が高騰する。住みたがる人々が大勢いるからだ。

「お客様の土地は、ちょうどメトロポリスの中心部になると思いますよ」

貼りついた笑顔を浮かべながら、業者の男が語る。

「ですので、とくに価値のある施設が落ちて来ると思っています。飛行バスのターミナル駅とか、オフィス街とリバーシブルになった公園とか、はたまた時間移動システム付きの高級マンションもありません」

どれも、数年前に生まれたメトロポリスでは開発途中だったものだ。次に生まれる都市では完成しているだろうと、人々は期待を込めて予想していた。

「今でしたら、お客様のご希望の金額でこちらの土地を買わせていただきます」

右へ左へと跳ね回っているのは、革靴をドリーに突っつかれているからだ。

「ご近所の方は、もうすでに売却を済ませてお引越しになりましたよ」

隣の家は車で十分以上走った先があり、森の半分以上を所有している地主だった。元々は値段があつてないような辺境なので、この機会に高く売り払ったのだろう。それが真つ当な判断に違いない。

けれど、私と夫はそう簡単には決断できないでいた。

私たちは仕事を引退する前から、余生を過ごす土地を探して、かなりの時間と労力を費やして来た。そしてやっと見つけた理想の地がここなのだ。心地良い鳥の囀り、季節ごとに違う風、優しい雨、透き通った高い空、そして新鮮な卵で作ったオムレツ……。手に入れてから、まだ二年も経っていない。

そんな私たちの顔色を察したのだろう。ドリーは高く跳ね上がり、男の顔面に強烈な蹴りを入

れた。そして流暢に言い放つ。

「おととい来やがれ」

逃げ帰る業者を尻目に、涼しい顔で地面をついばみ始める。

「ドリーはさすがだね」

私は笑って彼に話しかけた。が、なぜか返事がない。見ると、彼は何かを考え込んでいた。

「どうしたの？（こ）を売りたくなかった？」

「まさか」

そう言ってドリーを抱き上げた。そのまま高く掲げる。

「確かにドリーはさすがだよ。おととい来やがれ、だ！」

きよんとする妻と鶏に、彼は晴れ晴れとした笑顔を向けた。

卵はある日、前触れもなく割れた。

それはやはり朝早い時刻だった。いつものように、庭で朝食の準備をしていると、

キーンッ……

不思議な音が、朝の空気を震わせた。見ると、卵の殻に一筋、ヒビが入っていた。

そして水風船が割れるように、パンッと卵の殻が砕け散った。銀色にきらめく破片が紙吹雪のように舞う。まるで天からの祝福のように。

そして―頭上に巨大都市が浮かんでいた。

驚く間もなく、都市はゆっくりと落下を始めた。何十、何百という構造物が地上へと迫って来る。

やがて森に達すると、樹々をへし折り、轟音とともに地面に突き刺さっていく。私たちは逃げ出した。走りながら振り返ると、わが家が黒光りする超高層ビルに押し潰されるところだった。

必死に駆け上った丘の上で、私たちはただ呆然として座り込んでいた。

どれほど時間が経ったのだろう。

目の前には、生まれたてのメトロポリスが朝陽を浴びて輝いていた。

――まだ誰もいない。

静まり返った巨大都市に、二人の人間と一羽の雌鶏だけが立っていた。

業者の男が言っていた通り、わが家の土地は中心部になっていた。目の前の黒い超高層マンションは、あの時、逃げながら見たものに間違いない。あらためて見上げると、最上階は雲の中に霞んでいる。きよと目玉が飛び出すような値段なのだろう。

エントランスを通り抜けて、手近な部屋へ足を踏み入れた。どのドアも私たちが近寄っただけで自然に開いた。持ち主をわかっているらしい。

まだ何もない室内は、白い陶器でできた緩やかな迷路のようだった。が、私たちが求めていたものは、すぐに見つかった。

予想と違っていた形状に、私はちょっと動揺した。彼は気にならないのか、すでにあちこち触れて操作方法を試している。

「これって人間用でしょ？ 雌鶏は大丈夫かな？」

「君がガイドを見てくれよ」

私は黒いタイルの壁を眺めた。取り扱ひガイドが流れている。

『こちらはファミリー・タイムマシン・ルームのサウナタイプです。初期設定は……』

「よし、行けそうだ」

いきなり壁から熱い霧が吹き出した。彼の眼鏡が曇る。私はドリーが蒸し鶏にならないよう、強く抱え込んだ。

そして、私たちは戻って来た。

この森へ——メトロポリスのない、理想の地へ。

残念ながら私たちの家はもうないけれど、そのうちまた建てることもできるだろう。

素材になりそうなものは、森の中にたくさん落ちているのだから。メトロポリスが朽ち果て、廃墟となった、この百年後の森に。

あの時、ドリーが業者の男に向かって言った「おととい来やがれ」を聞いて、夫は気づいたのだそう。メトロポリスをおとといに——過去にしてしまえばいいのではないかと。

そのためには時間移動装置が必要になるが、今回生まれる都市なら、技術が成熟して住宅にも備え付けられているはずだった。つまりメトロポリスを利用して、メトロポリスが消えた時代へ引越すことを思いついたのだ。

今、私たちは廃墟の残骸から石材や鉄骨を拾い、簡素な小屋を建てて暮らしている。食事は木の実や野草、それにドリーが毎朝生んでくれる新鮮な卵があった。彼女はあのサウナで蒸し鶏になることもなく、むしろ羽の艶が良くなった。さすがだ。

そして今朝もまた、卵を一個生み落とした。

しかし、それはいつもと違う卵だった。

小さな——銀色の卵だった。

オムレツを作るつもりで待ち構えていた彼は、手を伸ばした姿勢で固まった。そして、私も。

廃墟は最後の力を振り絞って卵を生むという。そしてドリーは、いつも地面の砂をついばんでいる。廃墟が埋もれた、この砂を……

突然、夫は動き出し、卵を掴んだ。自分の額でヒビを入れ、焚き火で熱した鉄板に中身を落とす。黄身も白身も銀色だった。菜箸代わりの枝で混ぜながら焼くと、少し焦げた銀色のオムレツが出来上がった。さすがのドリーも気色悪そうに覗き込んでいる。

それをきっちり半分に分けて、私たちは「せーの」で同時に口にした。不味かった。

ドリーは驚いたように、ココッと一声鳴き、それから流暢に続けた。

「理解したい」

私と彼は笑って、砕いた卵の殻を高く放り上げた。ささやかな銀色の紙吹雪が舞う。

ようやく、私たちは静かな余生を手に入れた。